

吳錦堂を語る会通信

NO.39 Feb. 2018

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘 雄三 方「吳錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「吳錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2018.2.15



大正15年(1926年)1月14日逝去『吳錦堂先生哀思録』紹介

吳錦堂の事績並びに、親族ほか関係する人名を知る上で、楊壽彭編集『浙慈 吳錦堂先生六旬榮壽録』(1914年発行)と同氏編集『吳錦堂先生哀思録』(1926年発行)は、どちらも、この上ない貴重な情報を提供してくれます。『榮壽録』については、本通信第35、36、37号で取り上げました。引き続き、本第39号で、『哀思録』を取り上げます。使用資料は神戸華僑歴史博物館所蔵です。

まず、当頁で、全体(79頁)を概観します。続いて、第2、3頁に「序言」の原文を掲載し、現代日本語訳を併記しました。第4頁では、下の枠内、朱傍線の3カ所について補足しています。(編集委員 橘 雄三)

『吳錦堂先生哀思録』

一 吳公追悼大會發起團體(三十六団体)

華東通訊社 神戸三江商業會議所

神阪中華會館 神戸中華總商會

神戸國民黨支部 同文学校 (ほか略)

二 吳公錦堂遺像

三 写真九葉

吳公遺族告別式紀念撮影

吳公靈輜出門撮影

出殯行列撮影 ほか

四 吳公遺詩

五 序言 楊壽彭

六 吳公福郷碑記

七 祭文 誄文 弔詞 (其一〜其四十三)

其一 不孝子啓藩

其二 長姪啓夏偕弟啓鼎啓宇啓徳

其三 甥沈維鎬維楨維寶維嘉

洪福良華良楨良聘良

其四 駐神戸總領事周珏

其五 僑神阪各團體總代表周珏

其六 神阪中華會館理事長王敬斗

其七 神戸中華總商會代表鄭瑞圖

其八 神戸中華總商會會長鄭瑞圖

其九 大阪中華總商會會長張益三

其十 同文学校同人代表吳功補

其四十一 兵庫縣明石中學校長山内佐太郎

(ほか略)



補注
誄…るい
死者の功績
德行をほめ
たたえるこ
とば

八 輓聯輓幛(其一〜其百三十)

其一 男啓藩

其二 姪啓夏 啓祥 啓坤

其三 姪啓鼎

其四 姪啓宇 啓泰 啓巽 啓震

其五 姪啓徳 啓恩

其六 甥沈維鎬 維楨 維寶 維嘉

其七 甥洪福良 華良 楨良 聘良

其八 魏鳳翽率男廷樑 孫觀岳

其九 内姪魏瑞康同 慶同

其十 虞成愷率子和聰 孫順鼎 順謙 順泰 順升

其十一 虞成元率子和興 和皋 和康 和坤 孫順履

其十二 外孫徐日慶 日康 (以下略)

補注
輓聯…ばんれん
弔辭をのべた対
の歌



松海別荘を出る靈柩車

門の対聯は「昔年東渡成今日 一旦西帰作古人」

なお、この頁の画像二葉は、いずれも、『哀思録』より転載しました

『吳錦堂先生哀思録』 「序言」

当頁、及び次頁に、『吳錦堂先生哀思録』の「序言」を取り上げました。ところで、本通信第35、36、37号に、『浙慈 吳錦堂先生六旬榮壽録』の「序」と「壽言」を掲載いたしました。『榮壽録』と『哀思録』において、吳錦堂の事績を述べるくだりで、多く、重複がみられます。よって、『哀思録』「序言」について、重複する記述が多い箇所は省き、最後の部分のみを取り上げました。ご諒承願います。また、現代日本語訳について、編集委員の力不足で、不適切な箇所が多々あるかと思ひます。ご叱正願います。

なお、縦書きですから、枠内の先頭番号1、2の位置から左へ読み進めてください。（編集委員 橋 雄三）

1

先生は古希をすぎ、舞子の浜に隠棲して

いました。門は高い松に対し、楼は大海を見下ろしています。

一家の内は、上は和やかで下は睦まじく、子どもは親孝行で孫は賢く、みんななごやかです。壬戌（大正十一年、一九二二年）の春、先生は重病を患いましたが、回復しました。天の恵みの盛んなことの証しで、大徳によるものと感銘を受けました。

先生はいつも、国家のこと

を心にかけて、興利、勸学、企業など多くの遠大な計画において、その思いは以前と同じように盛大で、（今までやって来た仕事に）まだ満足でなく、心は緊張し、なお安らかではありません。

高松樓瞰大海一門以内上和下睦子孝孫賢雍々如也壬戌之春公病篤危而復安可徵天眷之隆由大德感召所致公每念及國家於興利勸學企業諸大計猶若意皇然未足心怵然不寤是又見公之精神意量遠出常人萬萬方謂天錫純嘏克享期頤何期噩耗傳來哲人其萎嗚呼痛哉猶憶今春元旦之翌日余訪公於上筒井別邸見其精神煥發議論風生殷々以三校合併義莊新建等計劃垂問并勵余以含苦茹辛勉爲其難勿萌退念別未旬日忽接其家人電話謂公病篤余爲之愕然即馳至其家方知公患急性肺炎已於新歷正月六日發病初起寒熱往來即延主治醫佐野譽醫師及京都前醫科大學校長中西龜太郎博士並兵庫縣縣立病院院長西廣吉博士診治

公年逾古稀隱居舞子之濱門對

先生の気力は普通人にはるかに勝つていて、まさに、天の賜る大福により、

よく、百歳まで長生きされると見受けられました。あにはからんや、訃報がもたらされました。哲人は亡くなられてしまうのでしょうか。ああ、なんと悲しいことでしょうか。

今もなお、思い起こします。今

春、元旦の翌日、私は上筒井の別邸に先生を訪ねました。お見かけしたところ、元氣はつらつとされ、話は次々とはずみ、三校の合併、新たな義荘建設などの計画について、懇ろに下問を受けました。また、併せて、先生は私に、辛酸を

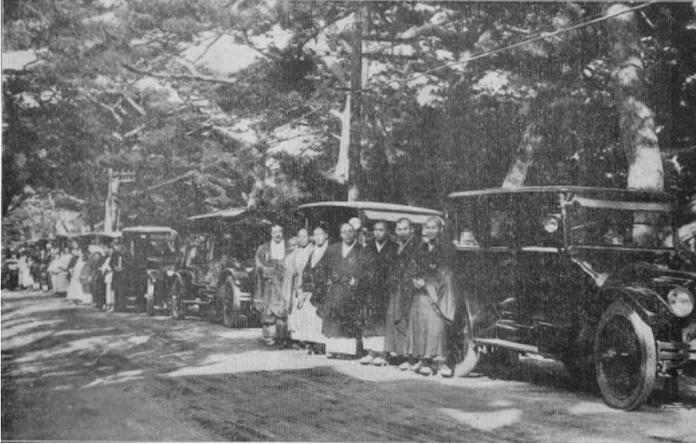
なめ、努めて難事をなし、退こうなどと考へるなど励まされました。

十日もせず、突然、ご家族から、先生が重病とのお電話を受け、私は愕然としました。即刻、先生宅へ馳せ参じ、先生が急性肺炎に罹られたと知りました。すでに、新曆正月六日に発病し、初め、寒氣と熱氣が去来、すぐに、主治医佐野譽醫師及び京都前医科大学校長中西龜太郎博士並びに、兵庫縣立病院院長西廣吉博士に來診を請い、診療を受けました。（3頁へ続く）

上の写真、背景は移情閣。長男啓藩と五人の孫たちです。一九二一、三年頃の撮影です。吳伯瑄氏所蔵



『吳錦堂先生哀思録』 「序言」 (続)



移情閣前、神明国道に並ぶ出殯の行列
『哀思録』より転載

2

(2頁より続く)

病は日を追って重くなり、十一日に至り、ほとんど危険な状態に瀕し、リンドル注射をし、少し意識は戻りましたが、十四日午後五時二十五分、にわかにならなれませんでした。ああ、なんと悲しいことでしょう。けれども、なお、心残りであるのは、先生の今わの際に、病人を絶対安静にさせるよう命じる医者に押しとどめられ、いささかも、ご尊顔を拝することができなかつたことです。

思い起こすに、壬戌の歳(大正十一年、一九二二年)、先生の病が極めて重篤な時、先生は

家人に命じ、電話で私を舞子の別荘に呼び寄せ

不肖私、謹んで日頃見聞きしている先生の事

ました。私は日中ずっと、ベッドの傍らについ

績について、そのあらましを述べ、(ふるさと

て看護をしました。先生は私の手を執ってねん

慈溪の) 福郷の碑文もとりあげ、併せて、先生

ごろに別れを告げ、家のことが心配なので、休

の遺墨、詩文数首、追悼会当日の親友の祭文、

みの手すきの時に、しよっちゅう、家の様子を

誄(るい)文、輓聯(ばんれん)などの優れた文章

見に来てほしいと頼まれました。幸いにして、

を収録しました。その文章は光り輝き、悲しみ

天の助けがあり、善人の先生は危険な状態を切

は人の心をうちます。まさしく、先生の功德、

り抜けました。今もなおこの壬戌の春のことを

人柄に、誰もみな同じく、感慨はひとしおです。

思い出し、先生のお言葉が亡くなり、まだ時間

ここに、これ等を編纂し、哀悼の意をしるし、

がたっていないのに、幾重もの幃(とばり)が

序といたします。

降りているように、まだ、最後のお別れをする

中華民國十五年二月

嶺南楊壽彭謹識

日漸沉重至十一日幾瀕於危乃用食鹽注射略復知覺延至十四日午後五時二十五分溘然長逝嗚呼痛哉然猶有憾者公於彌留時余以格於醫者絕對使病人安靜之命不得一見顔色回念壬戌之歲公病極危時公命其家人以電話召余到舞子別墅日侍病榻側執余手言別殷々以家事爲慮囑余休沐之餘常至其家幸而天佑善人轉危而安撫今追昔言猶在耳今乃故人易箴咫尺重幃未克爲最後之一訣傷哉余不敏謹以平日見聞公之行事叙其大概兼福鄉碑文并公之遺墨詩文數首又以追悼會當日各親友之祭文誄文輓聯等文藻璀璨哀感動人蓋以知公之功德及人同聲感慨爰輯成冊以誌哀思是爲序

中華民國十五年二月

嶺南楊壽彭謹識

『呉錦堂先生哀思録』補遺

ここでは、第一頁の枠内朱傍線三つについて補足いたします。

(編集委員 橘雄三)

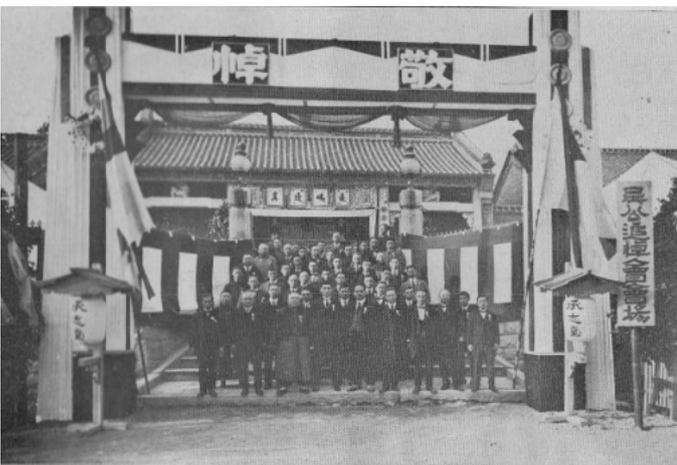
《1. 告別式並びに追悼会の写真》

呉錦堂は大正15年(1926年)1月14日、籠池の別宅で亡くなりました。満70歳。告別式は松海別荘で執り行われ、ここで納棺。そのあと、霊柩車で、棺は中華義荘へ。日を改めて、2月7日、36団体の発起で、中華会館で追悼会が開催されました。

下の写真は、『哀思録』掲載写真、九枚の最初の一枚で、「呉公遺族告別式紀念撮影」と注記があります。真ん中は、長男啓藩と孫たちです。啓藩の右となりの白い服装の女性は、呉錦堂夫人(丁氏)と思われま



下の写真は、同じく、『哀思録』掲載の一枚で、「追悼會職員撮影」と注記があります。背景の建物から、会場が中華会館であったことがわかります。



《2. 『呉錦堂先生哀思録』記載の続柄及び親族名》

『哀思録』の価値の一つは、呉錦堂の親族を知る上で貴重な情報を提供してくれていることです。特に、「八 輓聯輓幛」の其二～其十二に名があがる

「姪」、「甥」、「内姪」、「外孫」たちです。山口政子論文「在神華僑呉錦堂(1854-1926)について」(1983年)、並びに神戸華僑歴史博物館「陳徳仁コレクション」に含まれる呉錦堂の系図も、これによるところが大きいと推察いたします。

ところで、原文中の「姪」、「甥」の意味は、日本語の姪(めい)、甥(おい)と異なり、「姪」は兄弟の息子を、「甥」は姉妹の息子を指しています。諸橋『大漢和辞典』には、更に詳細な記述がありますが、この箇所の現代日本語訳としては、「姪」「甥」共に甥(おい)と結論いたします。

《3. 明石中学校長山内佐太郎の弔詞から思うこと》

『哀思録』「七 祭文 誄文 弔詞」に、華僑、ならびに、華僑関係の団体に混じって、其四十一兵庫縣明石中学校長山内佐太郎とあります。弔詞の文句は次の通りです。

「兵庫縣明石中學校職員生徒一同ハ 大人呉錦堂翁ノ逝去ヲ痛惜シ誠ニ哀悼ノ情ニ堪ヘズ其生前ニ於ケル本校教育ヲ賛助セラレタル芳志ヲ感謝シ學校長ハ職員生徒ヲ代表シ茲ニ香華一対ヲ献シ謹ミテ敬悼ノ誠心ヲ表ス」

ところで、「生前ニ於ケル本校教育ヲ賛助セラレタル芳志」とは具体的に何を言うのでしょうか。

明石中学は1923年4月に開校しました。その反響は大きく、第一回入学志願者は県内広く集まり、なかでも、神戸市は、1市で3分の1強を占め、地元は、明石市に明石郡を加えても2割ほどでした。

当時、呉錦堂は明石の桜町を中心に土地を所有し、このような状況での明石中学の設立に大きな関心を持っていたと思われます。その一つの証拠に、呉錦堂の孫5人(伯瑛、伯瑞、伯球、伯琮、伯瑄)が明石中学に学んでいます。

明石市史によりますと、「設立にあたって多くの篤志者から三十万円の寄付金が集まった。本市出身の中部幾次郎(大洋漁業株式会社社長)は、その半額十五万円を寄付した。(中略)中部幾次郎・多木条次郎ら多数有志の数次にわたる費用の寄付によって校舎の新築増築がなされました」とあります。具体的に名前が出てくるのはこの二人です。中部幾次郎は明石公園の入り口に銅像となって立っておりま

す。多木条次郎は加古川市にある、現・多木化学(株)の創業者です。

奉加帳をぜひ見たいものです。